

筆記試験合格体験記

南熊

私は造園会社に属しており、普段は緑地や庭園の維持管理作業を中心に動いている職人である。さらに近年では大きな造園工事等もなく、ゼネンコンの下請けで造園工事を行っているくらいで、他の受験者の方々が持っているような立派な経歴を持ち合わせていない。しかし、樹木医の業務という特異なものを経験してきているので、これまでの樹木や緑地の保護の経歴を前面にだして受験した。狙うは建設環境であった。

技術士試験の第一次試験は平成18年位に合格していたが、それからは勉強することもなく自信が無かったため、二次試験を受験していなかった。しかしようやく平成23年になり第二次試験を受験した。

そのときの私の年齢は38歳であり、妻、子供二人（当時9歳と4歳）の4人暮らし。仕事が月曜から土曜まで現場作業のため、まとまった時間がとりにくく、日曜日をどう使うかがポイントであった。しかし日曜日にも家族との時間ばかりとってしまい、実際勉強できたのは早朝か夜中であり、それもあまり長続きしなかった。

勉強内容は独学で書籍やネットにある見本論文を見てなんとなく勉強した。ネットで見つけた有志による無料添削を3回してもらったところ、内容は「いいですね、この調子で頑張りましょう」ということであった。

しかし試験本番では手書きの練習をしていなかったため腕が痛くて書けないのと、求められる制限時間に対応できなく、とにかく2枚半を書ききるだけに終始したように思う。今思えば論文内容も独りよがり、時間がたっぷりあると調べ考えながら書くことはできるが、試験では全体的な構成にまでは配慮できず、結果は一般B、専門Bであった。

24年1月思い切ってヒーローの技術士塾8回コースに申し込んだ。私は1月中旬に申し込んだので、2月からひと月に2回のペースで論文を提出し5月末まで計8回の提出期間となった。出費は痛いのが新年の目標として、中途半端に終わらせたくはなかったため、自分に大きなプレッシャーをかけようと思い申し込んだ。

そこから勉強開始である。まず、喉から手が出るほどほしかった他人脳である他の人の論文を読みこんだ。それまで独学であった私には、これが大いに参考になった。と言うのは、それぞれの論文に塾長が添削しているものを見られるからである。そこで不味いところ、うまいところ等多くのことが分かり、貴重な自分の体験とすることができたと思う。

それと同時に23年の試験体験でアウトプットの訓練と手書き訓練が無いと歯が立たないことを痛感させられたことから、早めに自分で論文も書き始めた。8月の試験日まで時間は十分にある為かインプットの読み込み学習ばかりに目がいきやすく、アウトプットの書き出し学習は正直億劫になる。それはインプットの学習は目に見えて進むが、アウトプットである論文の作成は時間を掛けてもなかなか目に見えて進まないからである。論文

提出期限が無かったなら、私の性格上、多分この時点で論文を書くという行為はやっていなかったと思う。だが、この時期での論文を書くというプロセスが、後で大いに威力を発揮すると思う。なぜなら、この時期でのインプットした内容はあまり覚えていないが、インプットしてその内容を考えて論文に書きだしたものは、なかなか忘れないからである。考えて考えて、しんどい思いをして書き上げた内容は、やはり頭に刷り込まれているものである。

具体的に論文を書くにあたっては、自分の中で予想問題の絞り込みが重要であった。過去問の流れや、時事的な社会問題などから 自分の中で予想問題の本命～おさえまでよく考えた。それにより、ある程度は論文を書いていく優先順位が決まった。

一つ目の論文は 建設環境の中でも全く分からない内容であり、かつ試験にも出そうな環境影響評価についてじっくり資料等を読んでから書き始めた。当初は熱意もあり、その分時間的余裕を感じられたのでインプットを十分してからアウトプットを考えて考えて書きあげた。

そんな調子で2、3月と順調に提出できたが、4月からはなかなか仕事が忙しくなり、2週間に一つの論文が大分しんどく感じ始めた。それでも提出期限という決まりごとがあるおかげで、遅れることはあっても論文を書いて提出することができた。

5月には社内の色々なことが重なり、なんとか一つの論文を提出できただけで、結局最後の8回目は提出することができなかった。それから徐々に気持ちも試験から離れて行き、時間を割いて勉強するということがなくなった。技術士試験にとって5月、6月と言う大事な時期をほとんど前向きに勉強することはなかった。それでも、技術士塾からのお知らせのメールで、他の人の論文がアップされたことが分ると、それを印刷して通勤時間等に読むことだけは続けた。私は論文を書いていなかったから 少し「蚊帳の外」のような心境もあったが完全に気持ちが切れなかったのは、こういう仲間がいてくれたお陰である。と今感じる。他の人の論文の進行具合をみて、「私もやらなければいけない」という焦りはあるものの、ズルズルして残り試験日まで1カ月余りとなる。

7月、スカイプで塾長としゃべった。何を話したか覚えていないが気持ちが楽になれた。それまでは「やらなければならない」という思いと、「しかし、やっていない」という現実によって硬直していた心が、ソフトに溶けたような感覚であった。スカイプではいつも私がどんな状態でも、受け入れてもらえるような感じがある。(私はスカイプの回数は少なかったかもしれないが、受講される方には是非たくさん利用すべきとアドバイスしたい。)スカイプで話したことで、またまたやる気が湧いてきた。「最後まであがき続けよう！」と思い始め、論文の提出期限は過ぎていて添削には提出できないが、自分で論文を書き始めた。2月から5月まで4カ月間で頑張って7つの論文を作成したが、5月中盤以降と6月はゼロ、しかし7月の1カ月だけで五つの論文を書いた。試験日までの日数を逆算して五日に一つくらいのペースで、どうしても押さえないテーマの論文をそれぞれ1論文ずつ計5論文を書いた。論文の内容構成や書き方はいつの間にか身につくにつつあったのか、夜中と早

朝、日曜日を利用して作成した。

試験本番、午前中の試験問題は予想していたものに近かった。時間に余裕があるため考えて自分の知識の限りを尽くして書けたと思う。それでも時間を目いっぱい使っていた。このことから午後の試験は、よほど時間に気を付けないと、書ききれないという最悪の結果になることが予想された。内容はどうあれ2枚半近く書けたら、合格発表日までワクワク感はあるだろう。しかし書ききれない場合は、試験が終わった瞬間に1年の勉強も終わる。(やはり手書き訓練は大切！)

午後は2題について時間配分を行い、なんとか終わった。これもやはりギリギリであった。途中で何人かが退出する姿をみて、あまりの早さに驚いた。書ききったのか、諦めたのかは分からない。試験問題は予想していたものと、関連はあるが違う内容であった。課題や問題、解決策の方向性はなんとなく書けたが、具体的な解決策のうちあと一つが出てこない。そこで普段、現場で感じていることから記憶を手繰り寄せ、書きあげた感じであった。こういう、練習していないぶっつけ本番で書くときは必ず全体的な構成からみて矛盾が無いかをチェックするように心掛けた。気持だけ前に出て書きすすめると、あとで全体的に見てなにかおかしいという文になってしまう怖れがあるからである。まあ、それでも「2枚半は書けたから、良しとしよう」という気持ちで、帰ることができた。

復元論文作成のため論文内容を思い出していると、専門の問題で自分の答案が、なにか題意から離れていることに気付いた。気付いた時には後の祭りである。もう技術的体験論文も全く手を付けず、何もしなかった。合格発表の日までは、塾長から「技術的体験論文を完成させる方がいいよ、結果ダメでも、またそれは役に立つから。」と言うようなことを伝えられた。また、「合格発表の日、必ず一人は技術的体験論文やってない人が泣きついてきますよ」とも言われた。

筆記試験合格発表の日、朝PCを開いた。落ちているだろうと思ってもドキドキする。番号を縦に探し始めた。自分の番号はなかった。やはりガッカリした、8か月分。そして、画面を閉じようとしたときに、なにか左側に探していた番号が見えた気がした。もう一度受験票と確認してみたら、その番号はあった。間違いなく受かっていた！。心の底から喜びが込み上げてきた。

筆記試験の勉強についてのアドバイスとしては、

とにかく大事なものは、やはり**書くこと！**に限る。書き方や注意点は塾長の添削（他の人の論文も含む）を見たら勝手に身に付くと思う。

あとはそれらに注意して書くべし、書くべしである。テーマに沿って、課題、問題点、解決の方向性、具体的な解決方法を明確にし、組み合わせる。だから、予想問題を10考えたら、その10のパターンは絶対に書くことが必要と思う。そうやって忙しい中で、走りながらも**考えて書いた内容**は、本番で威力を発揮した。

本番では、まず自分が考えた予想問題と全く同じものは出ない。そこは理解しておかないと、きつと 題意から離れて行くことになる。しかしそのテーマについて何かしら考えて書く練習をしていれば、本番で書き方や構成を少し変えることによって、対応できると思う。